

# 千葉県内出土板碑の諸相

齋 木 勝

## 1. 緒言

本誌前号に、「千葉県における板碑研究の現状と課題」として、板碑研究の実態を報告させていただいた。内容は下総型板碑に主体をおいたものであり、また、出土板碑に関しても特色的な数遺跡のみの報告となった。本稿はそれを補う意味で、県内の出土板碑を網羅的に集成して、その位置付けを検討したいと思う。

従来からの板碑研究は、その板碑碑面に刻まれた内容の分析が主体であった。しかし、遺跡に立ち、多くの遺跡をめぐる、発掘調査に長い間、係わってきた筆者としては、以前から板碑の碑面の内容に傾注する研究指向に違和感をもっていた。もっともっと板碑の造立時の状態を把握する必要があるのではないか、板碑はどのように造立されていたのか、造立時の姿が発掘調査の成果で求められないか。遺構に伴う板碑の出土状態から多くの事実が検証できないか、また、二次的な移動後の状態であってもそれは何かしらの意味を持っているのではないかと考えていた。そこで板碑の出土状態の精査が必要と思われたのである。

## 2. 出土板碑に関する研究略史

管見に触れた出土板碑に関するものは、以下のとおりである。

1930年、服部清道氏は南多摩郡忠生村（現町田市）出土板碑を報告<sup>1)</sup>する。板碑は傾斜面の中腹、丸塚中に積み埋めた状態で確認された。55基出土し、しかもすべて明応二年（1493）の三月（10基）と八月（45基）の紀年銘で、追善供養による一括造立とされた。

1959年、坂井利明、吉川國男両氏は埼玉県下の出土板碑を報告<sup>2)</sup>する。地下約60cmの深さより折れ重なって、総数166基発見された。文和二年（1353）から明応六年（1498）までの127基の紀年銘を確認し、15世紀の第2四半期は34基と造立数が多い。板碑が出土することについては、自然埋没と人為的埋没に分け、寺院の宗門争いに論及し、また、新田開発により、発

見された板碑が寺院に集められたと推察している。

1966年、久保常晴氏は1937年春に横浜市内の出土板碑を調査した成果を報告<sup>3)</sup>する。出土状態は、高さ約50cmを測る塚の下面の1辺2mの方形、深さ1m20～30cmの土坑から水平に重なり合って出土したという。基数は154基で嘉元三年（1305）から永正十年（1513）まで紀年銘が確認され、15世紀の第1四半期の50基が最も多い。板碑50基以上出土する遺跡を14例上げ、出土状況の分類を試みている。

1967年、小沢国平氏は著書『板碑入門』で「埋没の板碑」の項目を設け<sup>4)</sup>、①ある時期を経過した塔婆として埋没した。②墓地整理のため埋没した。③寺院の面目を改めるために整理した。④商品化したのが手持になって埋没したと分類した。

1980年、赤星直忠氏は海老名市上郷中世墓調査に関連して出土板碑について報告<sup>5)</sup>する。東西5m×南北8mの範囲に板碑群が10ヶ所確認され、5基並立が1ヶ所（観応三年、応永二年）、4基並立が2ヶ所（文安三年、貞和五年）、3基並立が1ヶ所（室町期）、2基並立が3ヶ所（室町期）、単独造立が2ヶ所確認するとした。注目すべきは板碑がすべて西向きであり、板碑群は南北方向に並ぶことである。

また、骨蔵器がすべて掘取られていることと、造立板碑のすべてがへし折られて、根部だけしか残っていないことを指摘している。

同年、諸岡勝氏は埼玉県下の板碑を伴う遺構に着目しその出土遺跡を集成<sup>6)</sup>する。11遺跡の遺跡占地を、古墳墳丘上、台地上、斜面、河岸段丘上と分類し、また、施設面で円礫、土坑、施設なし、不明例を分類している。

1987年、有元修一氏は、『埼玉県板石塔婆調査報告書』の成果に基づき、板碑の所在地を①墓地（35%）、②屋敷内（21%）、③境内（32%）、④路傍（1%）、⑤その他（畑地）（11%）と集計<sup>7)</sup>する。また、板碑





第1図 板碑出土遺跡位置図

の造立で、当初の造立地から移動していることに関して、近代以後、寺や墓地に集められた、その移動は大文字単位での移動が最も可能性が高い、板碑が原位置ではないということを確認することも重要であるとしている。

1988年、新倉明彦氏は群馬県内の板碑の出土例を取り上げて、板碑が廃棄される場合の理由として、造立地の土地整理とする<sup>8)</sup>。それは新勢力者の指示による土地開発等の理由で、土地一掃に伴う廃棄が行われた

としている。また、井戸より出土する板碑について、碑上面部の出土が多いことから主尊部を埋納するという意図を指摘している。

1992年、宮瀧交二氏は埼玉県内井戸跡出土の板碑の事例を集成し<sup>9)</sup>、板碑の廃棄に係る内容を論述する。

1996年、坂詰秀一氏は板碑を「埋没板碑」の観点で類型化<sup>10)</sup>する。建立不動と移動集積に分割、前者は元位置に遺存と自然埋没に分け、墳墓上(盛土・土坑)と横穴式墳墓内、自然埋没は墳墓、墓域内、火葬場と



第1表 板碑出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	型式	出土基數	出土状態	主尊	紀年銘	文献
1 ニッ塚古墳群	野田市ニッ塚	武藏型	2基	表土層下第3層出土	阿弥陀一尊	不明	戸向 朝夫 1985
2 三輪野山遺跡群	流山市三輪野山字道六神500他	武藏型	30基	土坑墓群から出土が、8×8の寺院跡	阿弥陀一尊、三尊	康永三年～永正七年	北澤 滋 1998
3 加地区遺跡群	流山市加地区	武藏型	1基	地下式坑182号出土	不明	不明	川根 正教 1994
4 中馬場遺跡	柏市根子中馬場1882	武藏型、下総型	24基	土坑、堀、井戸等出土	阿弥陀一尊、三尊、題目	正和、文明十三年、大永七年	古賀 隆信 1999
5 小金塚遺跡	松戸市根本356	武藏型	1基	トレンチ北側、灰層上面出土	阿弥陀三尊	不明	関山 純也 2002
6 南久保作遺跡	我孫子市中里字南久保作493	武藏型	3基	7号土坑出土	阿弥陀一尊	不明	岡村 真文 1983
7 鹿島前遺跡	我孫子市中峠台1他	武藏型	1基	25号遺構(大型土坑)出土	阿弥陀一尊	不明	岡村 真文 1982
8 下総国分寺跡	市川市国分1790-1他	武藏型	19基	国分寺出土	阿弥陀一尊、三尊	延慶三年～天文十年	山路 直充 1998
9 東中山台遺跡群	船橋市東中山2丁目	武藏型	1基	地下式坑出土	阿弥陀一尊	延慶?	石坂 雅樹 1997
10 万福寺境内遺跡	鎌ヶ谷市中沢字根郷484	武藏型、下総型	152基	14×10m、中央窪みに流れ込んで出土	阿弥陀一尊、三尊、題目	弘安七年～天文三年	一色 勝正 1985
11 明見六遺跡	八千代市島田台字間見六924他	武藏型	5基	土坑覆土上面出土	題目	なし	古内 茂他 2004
12 江原台遺跡	佐倉市白井田字遠部右38-1他	武藏型	5基	土坑、地下式福穴出土	阿弥陀一尊?	不明	高橋 健一 1979
13 白井城跡	佐倉市白井田字城ノ内他	武藏型	1基	II郭西辺、土堀内出土	阿弥陀三尊	文明三年	柴田 龍司 1984
14 高岡大福寺遺跡	佐倉市高岡字大福寺20他	武藏型	6基	墳墓堂(3.3×3.8)周辺出土	阿弥陀?	文〇	阿部 寿彦 1983
15 白井南遺跡	佐倉市白井1530他	武藏型	6基	土坑土層	阿弥陀一尊	文龜二年、享祿五年、水〇六年	伊礼 正雄 1975
16 古原城遺跡	佐倉市間野台1516他	武藏型	20基	土坑墓群出土	阿弥陀一尊、三尊	正和、弘安七年、嘉曆三年	嶺井文史郎 1977
17 和良土堀込城跡	西街道市和良比字堀込	武藏型	6基	001空堀中出土	阿弥陀一尊	曆應四年、康永三年	齊藤 毅 1991
18 廿五里城跡	千葉市若葉区東寺山町6	武藏型	25基	台地斜面上に散在出土	阿弥陀一尊、三尊	建武元年	森本 和男 1986
19 築地台貝塚	千葉市緑区平山町築地台	武藏型	3基	ローマ層上の褐色土層上面出土	阿弥陀一尊	貞治三年、永和五年	折原 繁他 1978
20 有古城跡	千葉市緑区有吉町559他	武藏型	1基	第2地点堆積層出土	阿弥陀一尊	不明	大野 康男 1984
21 富岡古墳群	千葉市緑区高岡町181他	武藏型	17基	1号墳の周溝外面から集積して出土	阿弥陀一尊、三尊	不明	加藤 正信 2002
22 松崎1遺跡	印西市松崎字坂東1006-1	武藏型	3基	土坑墓出土	阿弥陀一尊	不明	内田 龍哉 2004
23 小林城跡	印西市小林1474他	下総型	3基	虎口施設の礎石として利用	阿弥陀種子?	不明	井上 哲朗 1994
24 竜旗寺境内遺跡	本誓村竜旗寺	武藏型、下総型	872基	集中埋没、深さ1mに包含	阿弥陀	元應三年、正中～享祿四年	調 森 浩 1973
25 打手第二遺跡	印旛村山印字市場3402-3他	武藏型、下総型	51基	土坑覆土中層より発見した状態で出土	阿弥陀一尊	元應二年、明應〇年、文明十年、十三年	進藤 泰浩 1994
26 油作第一遺跡	印旛村平賀油作1170-1194	武藏型	1基	58号土坑出土	阿弥陀一尊	不明	高橋 誠 1991
27 上宿遺跡	酒々井町上本佐倉字上宿145-1	武藏型	1基	2号堀立柱建物跡出土	阿弥陀種子?	不明	香取 正彦 1997
28 北大塚遺跡	酒々井町本佐倉字北大塚473-1	下総型、在地型	2基	中世溝、台地地形跡出土	不明	不明	横山 仁 1996
29 関戸遺跡	成田市関戸字津ノ台	武藏型	2基	神社付近出土	阿弥陀一尊	不明	谷 旬 1983
30 妙福寺墓遺跡	成田市大山字天神台92他	武藏型	1基	201号土坑出土	不明	不明	齋木 勝 1985
31 二階口遺跡	大栄町前林字二階口	自然石	2基	深耕の際出土	阿弥陀一尊、宝篋印塔	文明十三年	宮川慎一郎 1979
32 埴谷川路遺跡	山武町埴谷字周路1874他	武藏型	6基	土坑出土	不明	不明	大和久義平 1982
33 小松遺跡	成東町小松字南台之下79-1	下総型	11基	土坑、井戸、溝出土	不明	不明	黒沢 崇 2004
34 羽戸遺跡	東金市小野字羽戸	武藏型	3基	火葬跡出土、破壊した可能性	阿弥陀一尊	不明	青木 幸一 2001
35 葦刈六之台遺跡	市原市葦刈字六之台1289他	武藏型	10基	塚上に並列立地、石組遺構を伴う	阿弥陀一尊	延慶二年、元亨二年	白井久美子 1994
36 台津跡	市原市加茂字台他	武藏型	12基	土坑墓上(北部)、溝出土(中央)	阿弥陀一尊	貞治七年	半田 堅三 1998
37 椎津城跡	市原市椎津字外郭他	武藏型	10基以上	主郭曲輪内出土	阿弥陀一尊	文保二年、曆應三年、貞治二年	笹生 衛 1990
38 神田遺跡	袖ヶ浦市蔵波字西久保上616他	武藏型	11基	古墳墳丘西側アラス状遺構出土	阿弥陀一尊、釈迦一尊	延文元年	曾真 紀子 1995
39 花輪遺跡	鴨川市下小原	在地型(五輪塔形)	4基	中世末五輪塔群中に遺立	五輪塔発心門	天文九年	鈴木 昭 2003
40 稲村城跡	館山市稲	武藏型	1基	a地点出土	阿弥陀三尊	元應元年	永沼 律朗 1984

※遺跡番号は、第1図の遺跡位置図番号と一致する。また、「文献」は文末の「参考文献」と一致。

分類、移動集積には遺存、意識的埋没、意識的放置（遺棄）と分け、前者には盛土、土坑、地下坑内、意識的放置には墓域内と井戸などの域内としている。

1999年、深澤靖幸氏は、出土板碑を、再利用や廃棄など多様な論点を提供してくれるものとし、考古学的研究法に期待する<sup>11)</sup>。

包括的な論考の中で、坂詰秀一氏は板碑研究を考古学的方法と視点が、文献史学の研究とともに同じ基底に立ちお互いを尊重することで新たな歴史研究の展開を期待するとしている<sup>12)</sup>。また、有元修一氏は発掘調査による板碑出土例の増加を葬送儀礼における具体的な板碑のあり方から成果を期待するとしている<sup>13)</sup>。

以上の学史を顧みるまでもなく、発掘調査における出土板碑に関しては、遺構調査という観点よりは出土遺物として取り扱われてきた感がある。したがって板碑そのものの記述はされるがその出土状態は等閑視される場合が多かった。

### 3. 板碑出土遺跡概要

第1図は板碑出土遺跡の所在地を表示した。数字は第1表の遺跡名と一致する。▲は武蔵型板碑、■は下総型板碑、○は在地型板碑、\*は自然石板碑を表わす。

出土板碑の南限はほぼ村田川で、一部東京湾岸沿いにも見受けられる。内陸部では、千葉県北西部に散在するが、特に印旛沼周辺から多く確認されている。

第2図から第9図まで遺跡出土板碑の拓影図を縮尺1/10で示した。掲図の趣旨は遺跡出土板碑が、板碑研究者に見落とされることがあるからである。我々が発掘調査した成果は、調査報告書として刊行するが、印刷部数は300部、もしくは500部で、そのほとんどは行政機関への配布という現実がある。板碑研究者が目にすることは極めて希である。なお、各板碑の詳細を論ずることは目的ではないので、必要の場合は出典文献での確認を希望したい。単独、破片であっても掲載するようにし、逆に多量の場合はそのボリューム感を重ねて示した。

以下、主要遺跡の板碑出土状況を概観したい。

#### (1) 三輪野山遺跡群<sup>14)</sup>

板碑は土坑墓から出土。最も古い紀年銘は康永三年(1344)であり、永正七年(1510)も読める。従って14世紀の中頃より板碑は造立され、16世紀の前半まで続いた。墓遺棄は15世紀以降、東西約200mの広さに拡大していった様相が窺える。

中世土坑墓群の東側には、寺院跡と考えられる基壇

部分と柱穴列が見られ、その規模は8×8mである。

#### (2) 万福寺境内遺跡<sup>15)</sup> (第2図)

出土した板碑は152基に及ぶ。紀年銘が確認できる板碑は、39基で、年代的には弘安七年(1284)が最古であり、天文廿三年(1554)を終期としている。造立基数の多い年代は14世紀第四半期の6基を最高となっている。墓地造成との関連で画期がある。

ここで注意されるのは、題目三尊の題目板碑である。最古の紀年銘は文保三年(1319)であり、位置的には中山法華教寺との関連が想起される。

本笠村竜腹寺境内遺跡<sup>16)</sup>の様相とも類似することであるが、全体基数に比べ紀年銘の有する板碑は全体の4割にも及ばない。また、掲図するように無加工の板碑の数多いことも注目される。

地上標識としての板碑は移動の可能性が強く、造立当時の状況を掴めないが、地下遺構としての骨蔵器は中世5基、近世2基、原位置を保っていた。それらの編年でも14世紀代の製作と思われる小型壺から15～17世紀と推定できるところから、板碑群もほぼその年代の造立と考えられる。

#### (3) 古屋敷遺跡<sup>17)</sup> (第3図)

「弘安七年十一月□日」(1284)「正和」(1312～16)「嘉暦三年十月」(1328)「延文」(1336～37)「文明□年」(1469～86)以上六基の紀年銘を確認する。遺構は27基の土坑墓と地下式坑1基であり、そのうちの3基の土坑墓から板碑が出土している。

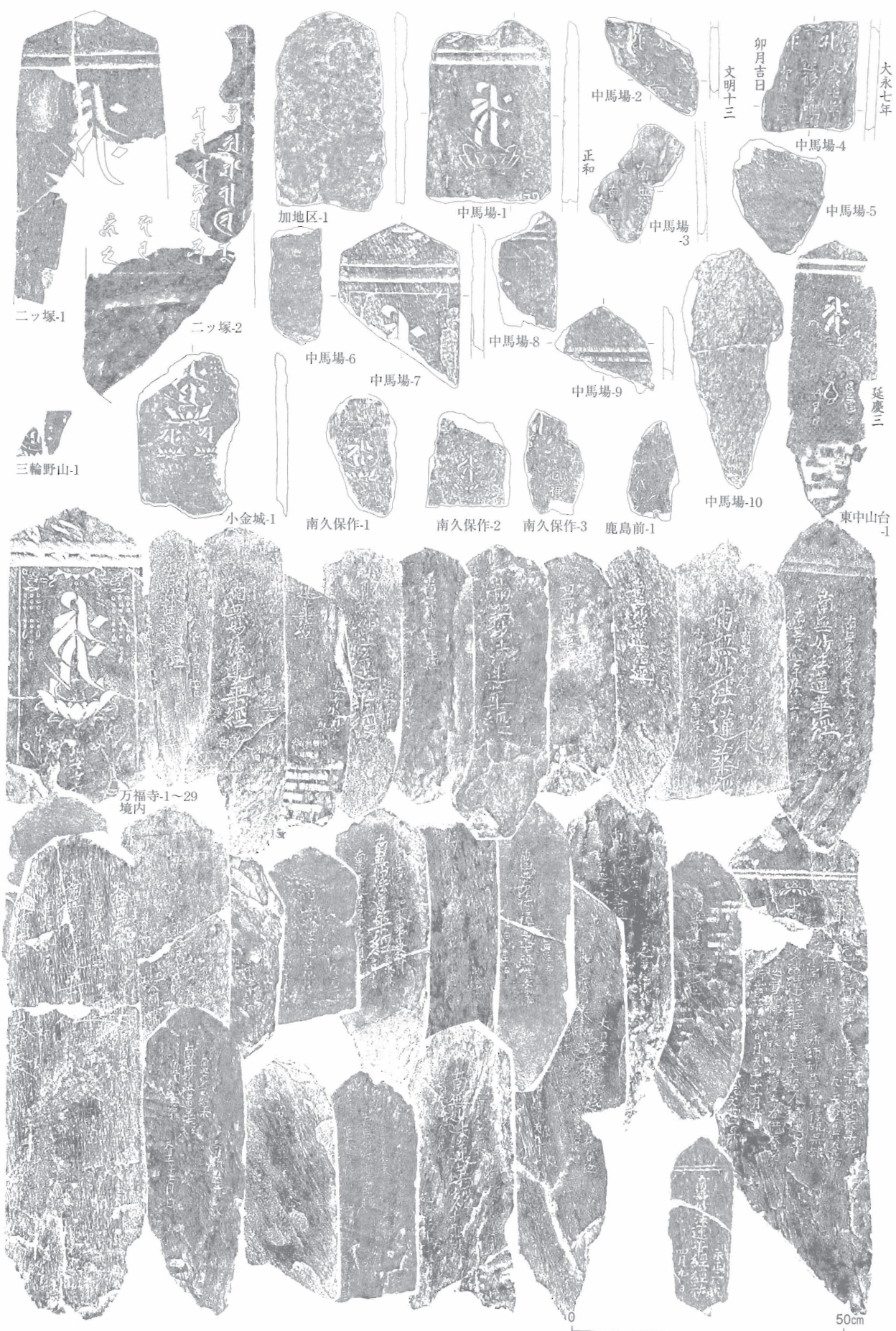
板碑の紀年銘から13世紀後半から14世紀、15世紀中期の「文明」までかなりの幅で時代を確認する。「弘安七年」「正和」の紀年銘を有する両碑は時代の特徴をよく示し、彫込みが明瞭で丁寧な作りである。

また、近年注目されている蝶型蓮座の板碑<sup>18)</sup>を確認している(第3図中段右)。

#### (4) 廿五里城跡<sup>19)</sup> (第4図)

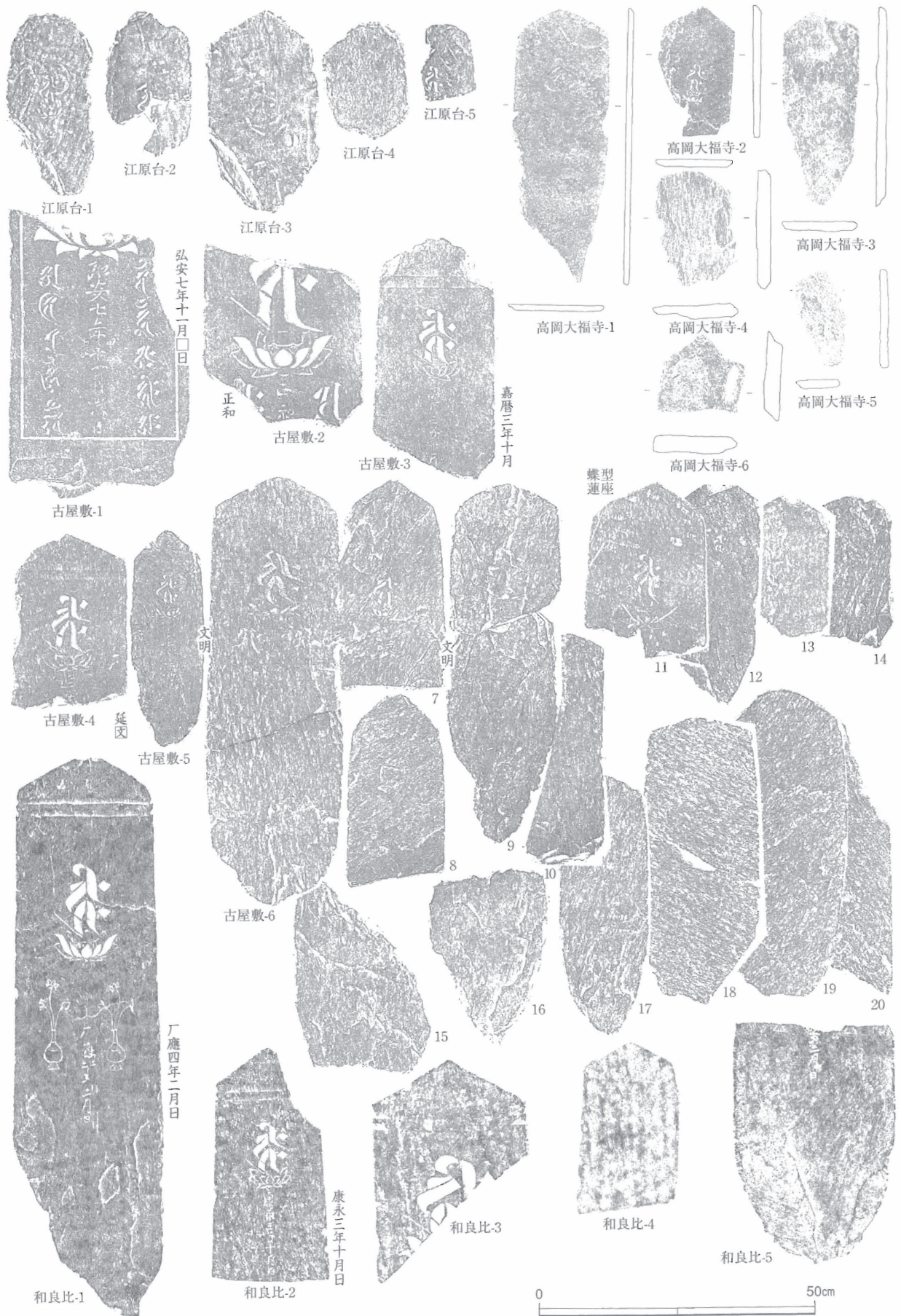
本遺跡は標高25m前後の台地上にあり、城館にかけると考えられる土塁などの遺構とともに火葬骨・骨蔵器が出土した。台地平坦部では多数の火葬骨の出土があり、墓の周辺や台地斜面では板碑や五輪塔・宝篋印塔の各部分が散在していることから、平坦部の埋葬地に造立されていた標記石塔群が地上標識として存在しながらも時代の変遷の中で地下遺構と遊離し、台地斜面に投棄されたものではないだろうか。唯一紀年銘を確認できる板碑は、「建武元年十月 日」(1334)で他の板碑もほぼ同時代か、それ以降の造立と思われ、14世紀第2四半期を中心に展開した中世の墓地景観の一





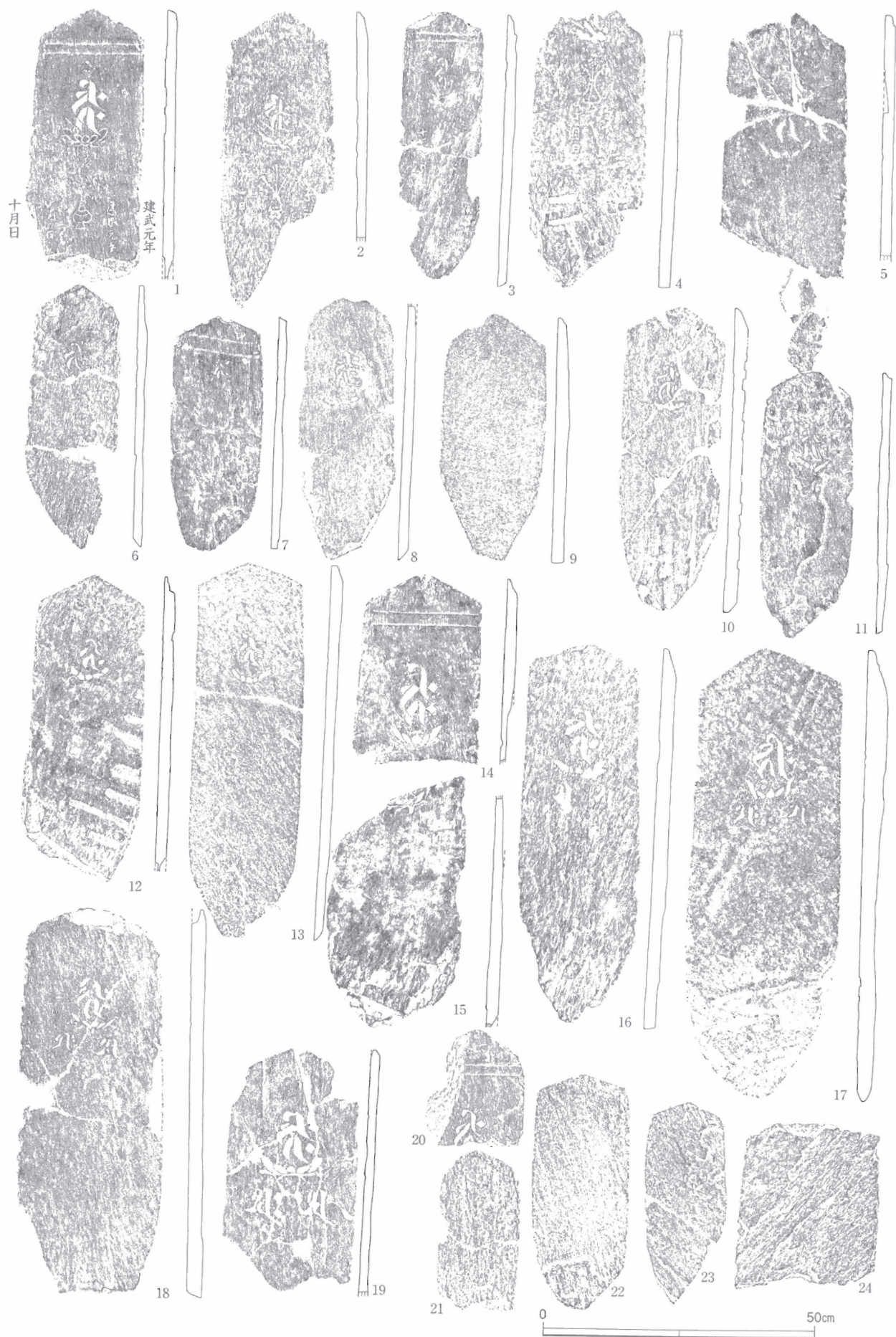
第2図 ニッ塚・三輪野山・加地区・中馬場・小金城・南久保作・鹿島前・東中小台・万福寺境内出土石板碑拓影図 (縮尺 1/10)





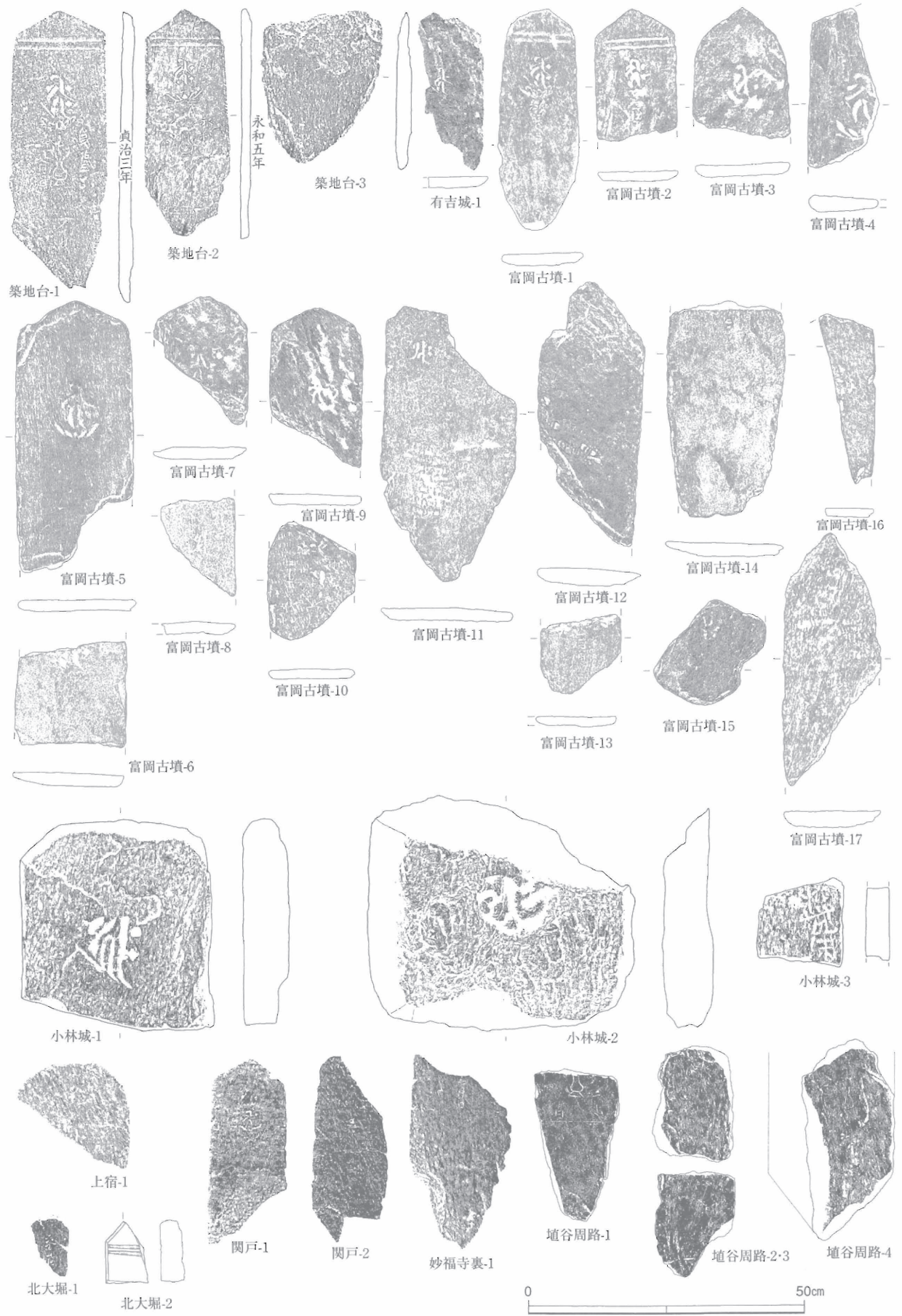
第3図 江原台・高岡大福寺・古屋敷・和良比堀込出土石板拓影図 (縮尺 1/10)





第4图 廿五里遗迹出土板碑拓影图 (缩尺 1/10)





第5図 築地台・有吉城・富岡古墳・小林城・上宿・北大堀・関戸・妙福寺裏  
埴谷周路出土碑拓影図 (縮尺 1/10)



つであったのであろう。報告書では土壘を築造する際に投棄されたと報告している。

#### (5) 打手第二遺跡<sup>20)</sup> (第7図)

板碑は、東西8m以上、南北2m以上の楕円形状で深さ1.3mを測る土坑の覆土中層に、不規則に散在しており、廃棄した状況で出土している(第7図上)。

調査は路線幅の発掘で全体を捉えることは不可能であるが、発掘では台地整形区画、掘立柱建物跡、土坑墓を確認している。

板碑が廃棄された土坑の機能はどのようなものか、当初は隣接して確認されている土坑墓に造立されていたと推察され、その墓の遺棄の際に廃棄されたものと考えられる。

この土坑に隣接して確認される掘立柱建物は3間×3間の規模で供養堂である可能性が高い。出土板碑は51基を数え、武蔵型、下総型の基数はほぼ同数である。紀年銘を確認できるのは4基で、それぞれ「元徳二年(1330)文明十年(1478)文明十三年(1481)明應□年(1492~1500)」で、すべて阿弥陀一尊であり、二条線を施していない。その他約6基には主尊の阿弥陀一尊種子を確認するが他の板碑は頭部が緩やかな山形に整形されている以外は、碑面への紀年銘の彫込みや装飾は一切加わっていない。

#### (6) 竜腹寺境内遺跡<sup>21)</sup>

1972年12月に発掘調査された遺跡で、武蔵型板碑861基(完形171基)、下総型板碑11基の合計872基の板碑が出土。多量の板碑の出土例は、近年では東京都環8光明寺地区遺跡出土の636基があげられる<sup>22)</sup>。

紀年銘が確認できる板碑は、73基で年代的には元徳二年(1320)が最古で享禄四年(1531)を最終としている<sup>23)</sup>。出土状況を見ると第Iトレンチでは集中して埋没しており、第IIトレンチでは地表下約1mに包含状況での出土である。これらは万福寺境内遺跡に類似する出土状態で墓地等の改変、埋葬時の改葬等により撤去され、あるいは廃棄された結果と考えられる。

紀年銘が判明した板碑の造立の傾向は、14世紀第2四半期の23基を最高に14世紀第1四半期の4基、同第3四半期の16基、第4四半期の4基となっており、14世紀前期中半頃から後期中半にかけて多い造立である。15世紀前半に一旦造立が途絶えたが、15世紀後半、第3四半期

が10基、第4四半期が9基と再び造立される。確認された板碑が800基と大変多い中で約9割の板碑が無銘である意味はどのような事情であろうか。これらは碑面に主尊や銘文を紙に書いたものを、貼り付けることで供養塔婆として造立されたのかもしれない。石への施工はそれ自体費用の掛かることであつたので<sup>24)</sup>、紙で代用することにより安価であるが、その時点での供養の意味はあるということであろうか。

題目板碑としては「応永廿五年」(1428)が確認されており、15世紀第2四半期の時代に日蓮宗の影響を窺うことができる。

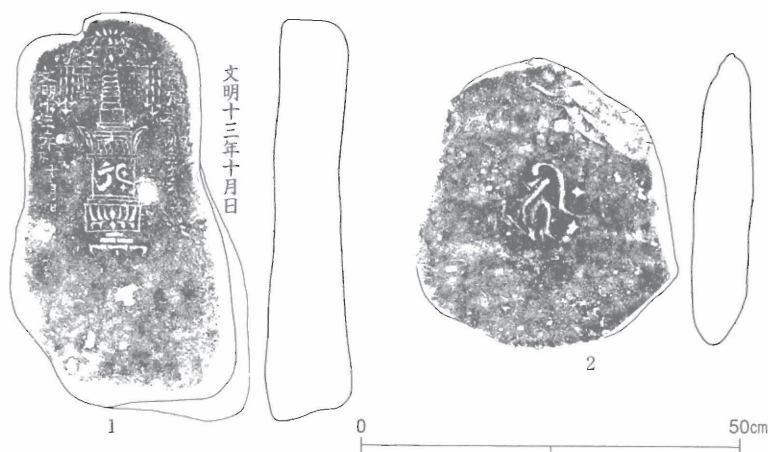
#### (7) 草刈六之台遺跡<sup>25)</sup> (第8図)

板碑群は塚の西側と東側の尾根に確認された。その塚は長辺が東西26.8m、短辺18.5mで基盤との比高は7.9mを測る規模である。

西側の板碑群は、基底部の堀込みは直径55cm、深さ25cmで多量の骨片が伴うという。

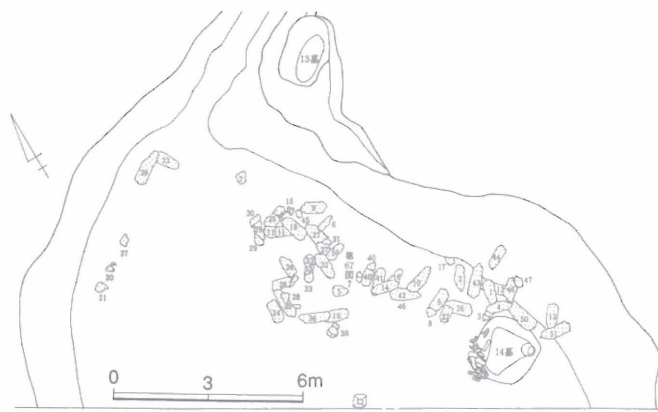
東側の板碑群は、板碑2基(写真1,2参照)と3基(写真3参照)の単位に分けられる。2基並立では基部の状況を精査したが明確な遺構は確認されなかった。3基の板碑群は、長辺1.5m、短辺1.2mの堀込の中に並列造立されていた。なお、板碑は東方を向く。

この直下に注目される石組みの遺構(写真4参照)が設置されていた。平面形は1.4m×1.4mの四角形で、西側の立石と中央の平坦になるように置かれた石の間には、板碑の基部が正位の状態で検出され、しかもその後背に三基並列していた中央部の板碑の「延慶二年八月日」銘の基部と接合する事実が確認された。従って現状では3基並列で造立されているように見えるが明らかにそれ以前は石組遺構に設置されていたことが判明した。

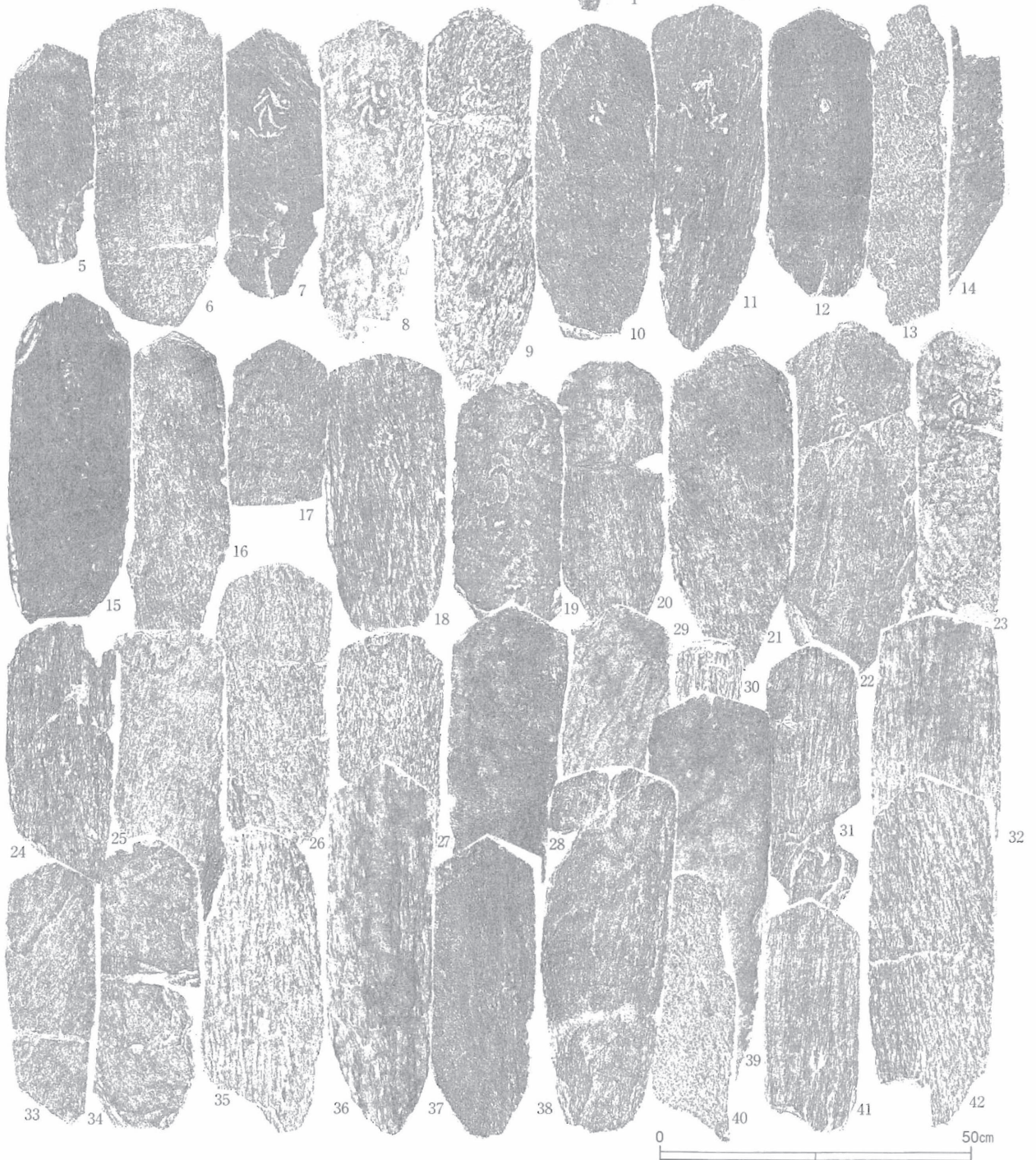
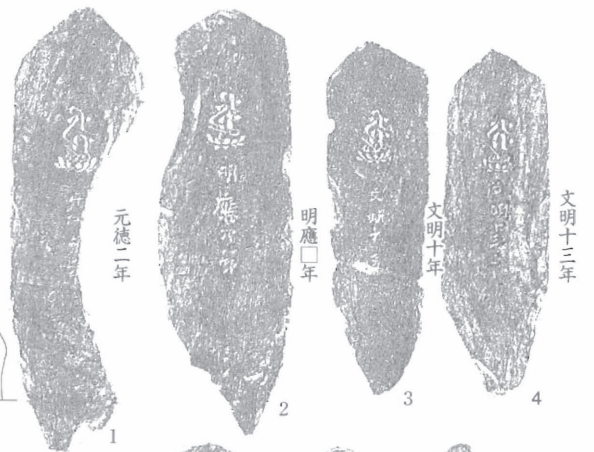


第6図 二階口遺跡出土板碑拓影図(縮尺1/10)



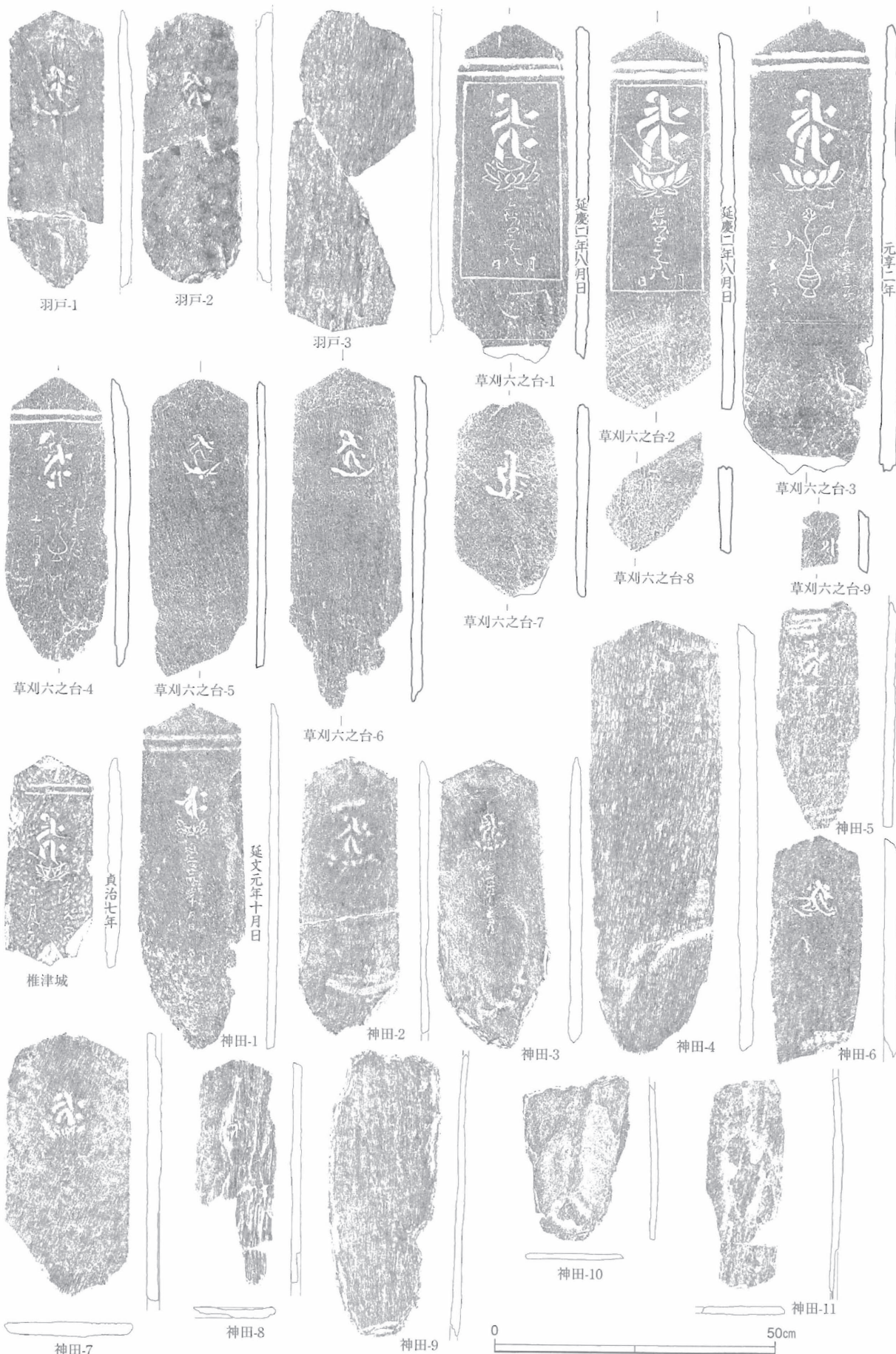


板碑出土状態



第7図 打手第二遺跡出土板碑拓影図 (縮尺 1/10)





第8図 羽戸・草刈六之台・椎津城・神田出土板碑拓影図 (縮尺 1/10)



これら遺構の石材は軟質砂岩で、また、各石材の間は、明褐色ロームと軟質砂岩粒で固定されている。

笹生衛氏は、この複合的な諸要素をまとめて「墓域の景観としては、台地の下方から見上げることのできる場所に墓域に中核となる板碑を伴う塚と供養・礼拝堂が存在し、その周囲に土坑墓、火葬土坑がブロック状に存在したと考えられる」<sup>26)</sup>としている。

(8) 神田遺跡<sup>27)</sup> (第8図)

板碑は、主軸を北西—南東に置く約40mの前方後方墳の後方部南西面を2～3段に削平してテラス状に造成された墓域に土坑墓24基、火葬土坑2基で構成された墓地として多数の五輪塔とともに造立された。これらの石塔婆は当初の位置での造立であることから大変重要な意味を持つ。板碑群の下部からは人骨を伴う土坑墓を確認している。景観とすれば板碑は南西に面して造立され、背景は古墳の墳丘を利用している。

(9) 花輪遺跡<sup>28)</sup> (第9図)

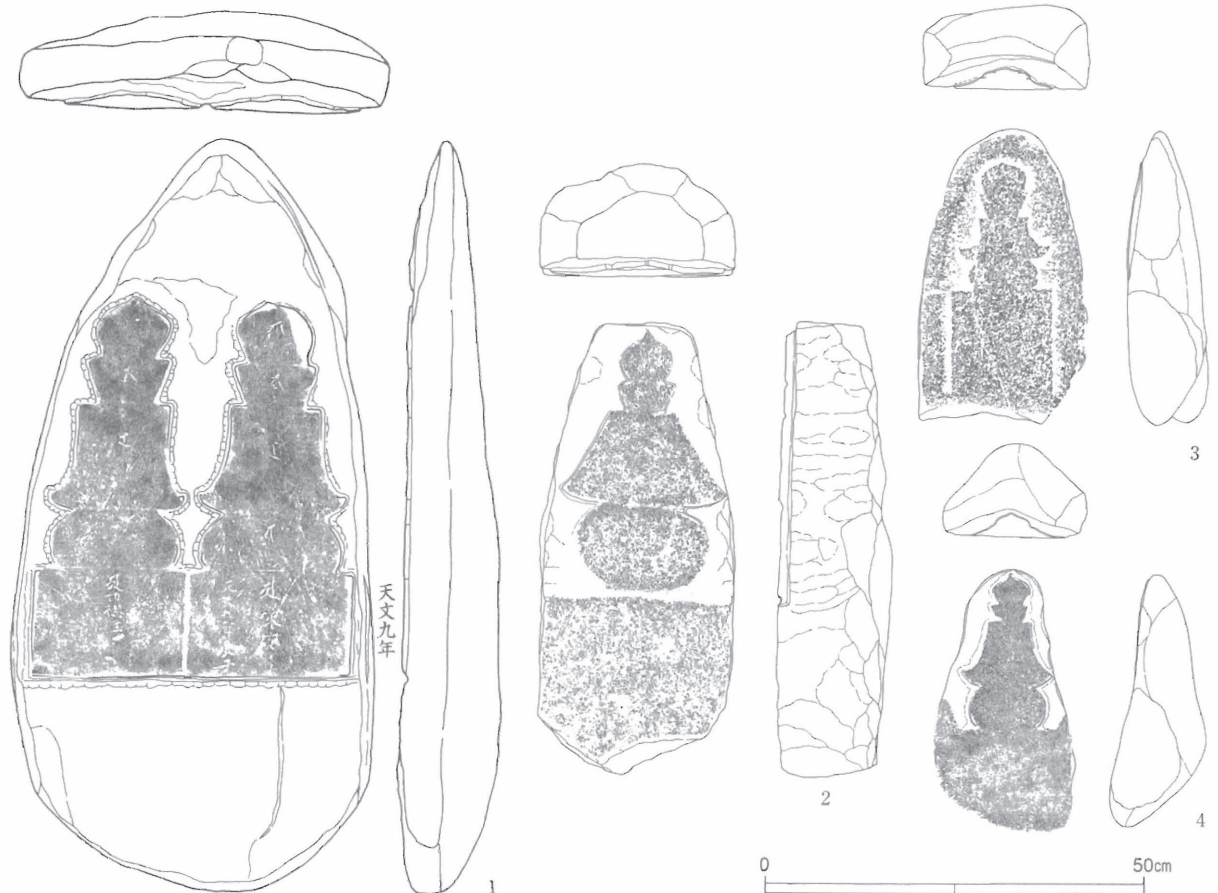
県南の嶺岡山系の麓で出土した板碑群で、南東側を下る斜面部に直線上に設置されている。地下遺構は確認されないことから当初の造立地というよりは、後世に五輪塔群と合わせて設置されたものと考えられる。

しかし、造立地は現所在地よりそれほど遠隔地というよりも極めて近い場所の造立であろう。

なお、図は報告書の実測図に拓影図を合わせて加工したものであることをお断りする。板碑はすべて五輪塔を陽刻したものである。

1は砂岩製、形状が舟形を呈し、正面には2基の五輪塔を陽刻し、各輪に「キャ、カ、ラ、バ、ア」の五輪発心門を刻す。また、右側の五輪塔には「天文九年」(1540)の紀年銘を確認する。

他の三基の板碑は、蛇紋岩製であることから厚さを持つ。形状は2が背面を面取したような加工で全体的に半円柱状に近い。3は舟形状を呈す。他の二基の地輪部は方形の刻出はなく、下部全面を地輪としていることが特徴である。陽刻された五輪塔は3、4は火輪の軒反りが顕著であり、水輪の形状が上下から圧縮されたような球状を示す。2の水輪の軒は直線的に開き反りは少ない。水輪は前者の形状に比べ、高さを持ち、最大径をやや上位に有し、下部がすぼまる形状であり立体感を持つ。従って前者より古式の様相を持つことが指摘できる。15世紀後半から16世紀前半の編年が与えられる。



第9図 花輪遺跡出土板碑 (縮尺1/10)



#### 4. 結語

県内で、板碑を出土する遺跡は前号で報告した大栄町大慈恩寺遺跡、栗源町台遺跡、光町城山遺跡、東金市前畑遺跡、千葉市生実城跡の5遺跡と今回の第1表で示す40遺跡を加えて、45遺跡を確認した。県下の発掘調査を考慮すれば板碑そのものは希な出土遺物と言えるのではないだろうか。

ここで注目したいのは、市原市草刈六之台遺跡（第8図上段）と袖ヶ浦市神田遺跡（第8図下段）の2遺跡である。前者は塚の東側尾根上に2基と3基に分かれて板碑が並列造立されていた。その中の1基の板碑の基部が石組遺構に伴って出土したことからこの施設の中に設置されていたことが確認された。この石組遺構が当初より板碑造立に伴うものかは不明確であるが、ある時期、塚東側に板碑が造立されていたことが確認されたのである。また、隣接して礎石を伴うお堂が立地し、その周囲には土坑墓等が営まれ、葬地としての景観を呈していた状況である。後者の神田遺跡は、古墳墳丘をテラス状に造成して墓域を形成していることである。この景観の類例とすれば、埼玉県小川町の一ノ入遺跡<sup>29)</sup>、和光市新倉午玉山遺跡<sup>30)</sup>が挙げられる。一ノ入遺跡は約8m×1.5mの三日月状を呈するテラス（平場）を作りだし、そこに板碑を南面して設置している形態は、神田遺跡の景観に近似するのではないだろうか。

板碑は、卒塔婆と供養塔という二面性を有することは周知のとおりである。また、後者には、追善供養と逆修供養という二つの造立趣旨を有していることも理解されている。板碑はこのように人々の思いを具現化したものであるところから注目される対象となり、年を経るに従って、多様な作用がもたらされる可能性がある。地上標識として移動することにより、地下施設と分離したり、作為的に投棄や破壊が行われるようになる。そのため散逸、遺棄が必然になるのであろう。今回の集成で二次的堆積が10例、二次転用1例、また、土坑、あるいは土坑墓に伴って出土した16例は辛うじて地下施設との分離を免れた出土例であろう。ただ、板碑そのものはそのほとんどが地上に露呈しているがため、当初の造立から移動されているものかどうか、その出土状況を把握する必要はある。

井戸から出土した例は柏市中馬場遺跡（第2図上段）、成東町小松遺跡がある。房総半島では出土例が少ないが、埼玉県内は井戸への投入例が他の出土例に比べ、格段に多い。その他、中世の溝出土の事例

が船橋市東中山台遺跡群（第2図右上段）、市原市台遺跡、成東町小松遺跡から確認される。中世城館跡に伴う堀から出土する事例は柏市中馬場遺跡（第2図右上）、四街道市和良比堀込城跡（第3図下段）から確認される。また、地下式坑からは流山市加地区遺跡群（第2図上段）、佐倉市江原台遺跡（第3図左上）から出土している。

題目板碑は、中馬場遺跡など3遺跡で確認されている。倉田恵津子氏は松戸市内の板碑の分布状況で各地区毎での様相を明確に指摘している<sup>31)</sup>。これは八千代市間見穴遺跡の題目板碑のみを伴う土坑出土例などから、地域の信仰と板碑のあり方が明確に一致するのであろう。

黒雲母片岩を用いた下総型板碑は中馬場遺跡、万福寺境内遺跡、竜腹寺境内遺跡、打手第二遺跡等で確認されているが、単独的搬入が多いように見受けられる。千葉県東部では飯岡石を用いた自然石板碑が造立されており、主尊には阿弥陀一尊種子以外にも宝篋印塔形の彫出が確認されている<sup>32)</sup>。

白亜紀砂岩を用いた在地型板碑は、印旛郡の酒々井までの広がり確認された<sup>33)</sup>。頭部駒形で近世墓塔の板碑型墓塔等関連が指摘できる（第5図左下）。

#### 謝辞

今回、出土板碑について報告できたのは、発掘調査による、報告書とデータがあったことによる。酷暑酷暑の中、また、寒風吹き荒ぶ発掘現場で奮闘した調査関係者には、個々にお名前はあげませんが大変感謝申し上げます。

総南文化財センターの加藤正信氏には、報告書の挿図の加工について快くご了解をいただいた。また、中央調査事務所の大谷弘幸氏には、市原市草刈六之台遺跡の板碑出土状況の原因確認や板碑実見に際し、大変ご配慮いただいた。

トレースに際しては、須藤美智子氏の手を煩わした。お礼申し上げます。

いつもながら、当センター資料部の方々には大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。

#### 注

- 1) 服部清道「圖師出土の板碑概報」考古学雑誌20-11 1930
- 2) 坂井利明、吉川國男「埼玉県朝霞町「一乗院」裏山出土の板碑について」金鈴No.9・10 1959
- 3) 久保常晴「横浜市港北区新吉田町出土の板碑群」日本歴史考古学論叢 1966



- 4) 小沢国平『板碑入門』1967
- 5) 赤星直忠「埋納場所と造立板碑との関係」神奈川県埋蔵文化財調査報告19 1980
- 6) 諸岡 勝「板石塔婆を伴う中世墓址 — 埼玉県内の例を中心に —」埼玉県立歴史資料館研究紀要第号 1980
- 7) 有元修一「板碑の分布と荒川の役割」『荒川』人文1 荒川総合調査報告2 1987
- 8) 新倉明彦「出土板碑より見た板碑の造立と破棄について」群馬の考古学創立十周年記念論集(助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 9) 宮瀧交二「板碑の廃棄に関する基礎的研究(一) — 埼玉県内における井戸跡出土の板碑をめぐって —」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』9 1992
- 10) 坂詰秀一「板碑研究の一視点〜埋没板碑の語るもの〜」毛呂山町歴史民俗資料館研究紀要第2号 1996
- 11) 深澤靖幸「考古資料としての板碑 — 武蔵型板碑を例として —」帝京大学山梨文化財研究所報第36号 1999
- 12) 坂詰秀一「中世史研究と石造物」品川区史料(十)品川御殿山出土の中世石造物 1997
- 13) 有元修一「板碑」『地方史事典』地方史研究協議会 1997
- 14) 北澤 滋「三輪野山遺跡群」『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 1998
- 15) 一色勝正他「万福寺板碑発掘調査報告書」鎌ヶ谷市史資料集11 1985
- 16) 竜腹寺境内埋没板碑発掘調査団『印旛郡本埜村竜腹寺境内埋没板碑発掘調査報告』1973
- 17) 嶺井文史郎『間野台, 古屋敷遺跡発掘調査報告書』日本歴史出版 1977
- 18) 渡辺美彦「神奈川県」『板碑の総合研究 2 地域編』1983
- 19) 森本和男他『千葉都市モノレール環形埋蔵文化財発掘調査報告書 — 五味ノ木遺跡, 殿山堀込遺跡, 廿五里城跡, 京願台遺跡, 柳沢遺跡』1986
- 20) 進藤泰浩『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書 千葉県印旛郡印旛村平賀徳行遺跡, 山田虎ノ作遺跡, 井ノ崎台遺跡, 光明寺遺跡, 打手第二遺跡, 山田諏訪遺跡』(助印旛郡市文化財センター第81集 1994
- 21) 注14に同じ
- 22) 小松 清, 野本孝明編『環8 光明寺地区遺跡調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1997
- 23) 千葉県『千葉県史料』金石文篇二 1978
- 24) 蓮田市辻谷共同墓地所在「延慶四年(1311)銘板碑裏面に『佰五十貫』の刻銘」埼玉県「新編埼玉県史 資料編9 中世5 金石文・奥書」1989 p. 563
- 25) 白井久美子, 島立 桂編著『千原台ニュータウン6 草刈六之台遺跡』(助千葉県文化財センター調査報告第241集 1994
- 26) 笹生 衛「草刈六之台遺跡」『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 1998
- 27) 當眞紀子『千葉県袖ヶ浦市神田遺跡・神田遺跡群』(助君津郡市文化財センター発掘調査報告書第101集 1995
- 28) 鈴木 昭『千葉県鴨川市湯貫田遺跡・花輪遺跡』(助総南文化財センター調査報告第47集 2003
- 29) 諸岡 勝他「一ノ入遺跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書台32集 1980
- 30) 和光市午王山遺跡調査会「新倉午王山遺跡発掘調査概報」1979
- 31) 倉田恵津子「松戸の板碑」『板碑』文化ホール紀要四 1981
- 32) 宮川慎一郎「千葉県における板碑文化 — 香取郡大栄町出土の宝篋印塔所刻板碑の紹介をかねて —」MUSEUMちば, 千葉県博物館協会研究紀要第10号 1979
- 33) 横山 仁, 香取正彦『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書1, 酒々井町本佐倉北大堀遺跡』(助千葉県文化財センター調査報告第278集 1996

<参考文献>

- ・青木幸一『小野山田遺跡群Ⅱ — 羽戸遺跡』(助山武郡市文化財センター第70集 2001
- ・阿部寿彦他『高岡遺跡群1』佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 1993
- ・石坂雅樹, 志村 亨『東中山台遺跡群(8, 9)』(助船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1997
- ・一色勝正他『万福寺板碑発掘調査報告書』鎌ヶ谷市史資料集11 1985
- ・井上哲朗編『印西市小林城跡一般県道印西印旛線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』(助千葉県文化財センター調査報告第250集 1994
- ・伊礼正雄, 熊野正也『白井南』佐倉市教育委員会 1975
- ・内田龍哉, 栗田則久, 山岡磨由子「松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書2」2004
- ・大野康男「有古城跡」『千葉東南部ニュータウン15 — 馬ノ口遺跡, 有古城跡, 白鳥台遺跡』1984
- ・大和久震平『埴谷周路遺跡調査報告書』山武町教育委員会 1982
- ・岡村眞文『鹿島前遺跡第4次発掘調査概報』1982
- ・岡村眞文『我孫子市埋蔵文化財報告第3集』1983
- ・折原 繁他『千葉市築地台貝塚, 平山古墳』1978
- ・加藤正信『千葉東南部ニュータウン24 — 千葉市富岡古墳群・富岡古墳群B支群』(助千葉県文化財センター調査



- ・香取正彦, 落合章雄『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書3, 酒々井町上本佐倉上宿遺跡』  
 (財)千葉県文化財センター調査報告第298集 1997
- ・川根正教『加地区遺跡群Ⅲ』流山市埋蔵文化財調査報告書vol.19 1994
- ・北澤 滋『三輪野山遺跡群』『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 1998
- ・黒沢 崇『広域営農用地農道整備事業九十九里地区埋蔵文化財調査報告書—松尾町大宮神社低地遺跡・成東町  
 小松遺跡・横芝町新島旧三島本郷遺跡』 2004
- ・小宮隆信, 井上文男『中馬場遺跡(第4次)』柏市埋蔵文化財調査報告書38 1999
- ・斎木 勝他『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書I—成田地区—』 1985
- ・齊藤 毅他『和良比遺跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書43 1991
- ・笹生 衛『「市原市椎津城跡」』『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第10集(財)千葉県文化財センター調査報告  
 第185集 1990
- ・柴田龍司『白井城跡』千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集 1984
- ・白井久美子, 島立桂編著『千原台ニュータウン6 草刈六之台遺跡』(財)千葉県文化財センター調査報告第241集  
 1994
- ・進藤泰浩『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書 千葉県印旛郡印旛村平賀惣行遺跡, 山田虎ノ作  
 遺跡, 井ノ崎台遺跡, 光明寺遺跡, 打手第二遺跡, 山田諏訪遺跡』(財)印旛郡市文化財センター第81集』  
 1994
- ・鈴木 昭『千葉県鴨川市湯貫田遺跡・花輪遺跡』(財)総南文化財センター調査報告第47集 2003
- ・関山順也編著『小金城跡(第6地点)』松戸市遺跡調査会 2002
- ・高橋健一他『江原台』佐倉市教育委員会 1979
- ・高橋 誠『千葉県印旛郡印旛村油作第1遺跡』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書57 1991
- ・谷 旬『成田新線建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 関戸遺跡』 1983
- ・當真紀子『神田遺跡・神田古墳群 千葉県袖ヶ浦市』(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第101集 1995
- ・戸向朝夫『千葉県野田市二ツ塚古墳群』野田市遺跡調査会報告第3冊 1985
- ・永沼律朗『館山市稲村城跡』『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集—稲村城跡・白井城跡発掘調査報告—』  
 1984
- ・半田堅三『台遺跡』『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 1998
- ・古内 茂他『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3—八千代市間見穴遺跡—』2004
- ・嶺井文史郎『間野台, 古屋敷遺跡発掘調査報告書』日本歴史出版 1977
- ・宮川慎一郎『千葉県に施ける板碑文化—香取郡大栄町出土の宝篋印塔所刻板碑の紹介をかねて—』  
 MUSEUMちば, 千葉県博物館協会研究紀要—第10号 1979
- ・森本和男他『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書—五味ノ木遺跡, 殿山堀込遺跡, 廿五里城跡,  
 根崎遺跡, 京願台遺跡, 柳沢遺跡』1986
- ・山路直充『下総国分寺跡』『千葉県の歴史』資料編中世1 考古資料 1998
- ・横山 仁, 香取正彦『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書1, 酒々井町本佐倉北大堀遺跡』  
 (財)千葉県文化財センター調査報告第278集 1996
- ・竜腹寺境内埋没板碑発掘調査団『印旛郡本笠村竜腹寺境内埋没板碑発掘調査報告』1973



草刈六之台遺跡（市原市）板碑出土状態  
中央調査事務所提供による



写真1 板碑2基 正面

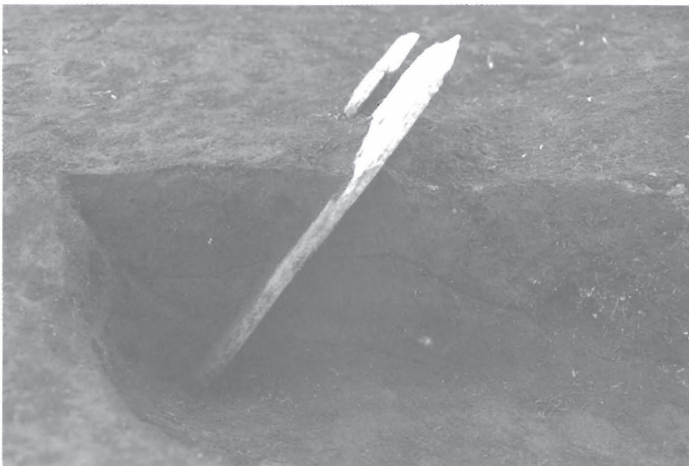


写真2 板碑2基 側面



写真3 板碑3基 正面



写真4 石組み遺構 正面